

ニガウリの促成栽培における仕立て・整枝方法が生育，収量 および作業時間に及ぼす影響

橋田祐二・細川卓也・玖波井邦昭*・小松秀雄**

Effect of Training Method on Growth, Yield and Work Time of Bitter
Gourd in Forcing Culture

Yuji HASHIDA, Takuya HOSOKAWA, Kuniaki KUBAI and Hideo KOMATSU

要 約

ニガウリの促成栽培において，安定多収生産の可能な栽培管理技術を確立するため，収穫枝を連続して更新する整枝法において，仕立て・整枝方法が，生育，収量および作業時間に及ぼす影響について検討した．

1. 収穫枝を3本とした慣行整枝法に対し収穫枝を1本とした新整枝法は単位面積当たりの更新枝数および収穫果数が増加し，可販果収量は20%多かった．また，主要な管理作業に要する時間は主に整枝作業の短縮により，10%削減された．
2. 株間が狭いほど単位面積当たりの更新枝数は多かったが，収穫果率は低く，収穫所要日数が長かった．可販果率はほぼ同じで，可販果収量は67cmで最も多かった．
3. 12～2月の収穫枝当たりの着果数を6果とした場合に可販果収量が多かった．
4. 更新用の側枝の数を5本とした場合，10本に対して収量を低下させることなく，主要な作業時間は18%削減された．特に，整枝作業に関する削減効果が大きかった．

キーワード：ニガウリ，促成栽培，仕立て，整枝，生育，収量，作業時間